

まちづくりネットワークきしわだ 会議録（08/02月）

- 日 時：平成20年2月27日（水）18：30～20：30
- 場 所：市立公民館3階講座室
- 参加者：藤井康信、池阪雄宏、中村二三子、松阪正純、森口茂樹、野路義幸、金野精一郎、中村富和、榊原敬、
阪井健二、東山千恵、屋馬光一、松山勉、上野好明、細身力、森内正和、栄沢直子、今村信彦、
大須賀一仁、和田裕、西出秋雄
＜司会：金野、書記：松阪＞
- ゲストスピーカー：白木 江都子さん（貝塚市立自然遊学館、NPO 法人大阪自然史センター理事）



近木川は貝塚市の中心部を流れる川です。生活排水等により、全国水質調査でもワースト1になったこともある川でしたが、市民はワースト1を機会に近木川に関心をもち、近木川のことを考えるようになりました。

貝塚市立自然遊学館は“近木っ子探検隊（平成9年度環境庁水環境賞）”による生き物観察会や源流探検、近木川の再生に向けた“近木川フォーラム”などを実施しました。また平成12年には、“全国トンボ市民サミット”も開催されました。

自然遊学館にお勤めの白木さんは、大阪市生まれ。大阪府立大学農学部園芸学科を卒業後、生物の教員をされていた。結婚を機に教員を退職され、現在は、葛城町にお住まいです。

- テーマ：「生きもの屋にできること！ ～守りたい！近木川の自然！！～」

◎ スピーチ内容

＜自己紹介＞

- 私は50歳から働き始めました。最初の1年は、評議員をしていた大阪市立自然史博物友の会行事を真似て自然関係行事を組み、友人知人親類を動員していました。
- ウィークエンドレッスンと名付けた室内講座は内容が素晴らしいのに参加者が集まらず、職員を動員してばかり、大人は今さら勉強したくない、という忠告を聞いて、今では親子主体の野外の行事を数多く企画しています。
- 近木川は水間で梶谷川と合流し、貝塚市内中央部を背骨のように流れている川です。
- 近木川がワースト1になったことがきっかけで、河川協会会長だった吉道市長の願いもあり、近木川に目を向け、近木川をフィールドにした行事を中心にしました。
- 都市公園「市民の森」の中に、関空交流館（関空調査会が運営）、その隣がシェルシアター（野外劇場）、貝塚市立遊学館があり、昔は自然遊学館の2階にレストランがありました。



<近木川の下流域>

- 「子どもたちに海のことを知って欲しい」という想いから、干潟の生き物、貝拾い（観察会）をしています。
- 冬の強い北風で、二色の浜に貝がたくさん打ち上げられます。貝を拾った後で、先生に貝の名前を教えてください。
- 「大潮の夜の海探検」では夕方4時頃から集まって、沈み行く夕陽を眺め、近木川河口や二色の浜で投網を打って魚を捕り、カニかごを仕掛け、夜光虫を観察したりします。抽選をしなければならない大人気の行事です。
- ハクセンシオマネキ（白扇潮招き）はかなり小さい砂ガニの仲間です。穴の中のオスは片方の大きいハサミを振ってメスを誘い、巣穴に引っ張り込みます。砂の中に混じる藻類を食べて残りの砂を団子にするので、砂団子があることで、ハクセンシオマネキがいることがわかります。汽水域いるカニです。
- ハクセンシオマネキは「レッドデータブック（日本の絶滅のおそれのある野生生物などを記載）」にも載っているカニで、希少種です。「ハクセンシオマネキがワーストワンの近木川にいる！」と分かって。近木川が一層有名になりました。
- イセウキヤガラ（カヤツリ草の仲間）もハクセンシオマネキの調査を続けているうちに見つかりました。大阪府で自生していると報告されているのはここだけのようです。



- 近木川の河口にはヨシがたくさん生えています。
- ヨシは浄化作用があることで有名ですが、そのためには刈って燃やさなければなりません。ヨシを刈り、そのヨシを使って遊んでみました。
- ヨシの辺りには、イワガニの仲間であるクロベンケイ、アカテガニ、ハマガニもいます。はさみの部分には毛がいっぱい生えており、その部分で匂いを感じます。

- においの強いたくあんを小さく切って、カニ釣りをしました。みんなで採った数や甲羅の大きさを競い合い、優勝を決めます。行事終了時にカニは逃がします。このイベントは毎年9月頃実施しています。

<近木川の中・上流域>

- 近木川の中流（国道13号線あたり）では、河畔木が残っており、山芋を掘った後の穴などがありますが、みんなで探検しています。
- 上流域は、水がきれいなので水辺の楽校を開催し、魚になって泳いだり、飛び込んだりして遊んでいました。現在、松葉荘のあったところでは工事がされており、どうなっているのか心配です。
- 蕎原地域は、貝塚の中でも自然が一番多く残っている所です。子ども達は動物を追っかけて採集するのが大好きです。
- 生き物探検でヘビを触って遊んでいます。ヘビを触っている女性は自然遊学館の職員で、哺乳類・両性は虫類が専門です。初めての本を出すなど、活躍され非常に忙しくされています。

<貝塚市立自然遊学館について>

- さて自然遊学館についてお話しします。
- 自然遊学館は二色産業団地を含む埋立地の中の都市公園「市民の森（2.6ha）」の中にあります。
- 自然遊学館は貝塚市政 50 周年を記念して、平成 5 年 10 月に建設されました。
- 自然遊学館では、その裏に自然生態園をつくり、今もつくり続けています。
- 「どうせ作るなら手作業で！」ということで、全て手作業で行いました。多くのボランティアの方が参加してくれました。また材木も貝塚市のものを使っています。
- ビオトープ自然生態園が完成しましたが、ここに植えている植物は貝塚で採集されるものばかりです。先程紹介したヨシも植えています。
- 池の水は雨水のみ、貯水タンクに雨水を溜めて、渇水時に補充しています。底は粘土を敷いています。ビールケースを並べた貯水槽をバッタの原っぱの地下に設置しています。
- トンボの池では、トンボのヤゴを守るために、ザリガニ釣りをしています。
- 誰かが勝手にザリガニを池に放り込み、爆発的に増えてしまいました。それなら「イベントとしてザリガニ釣りをしちゃえ！」ということで始めました。
- でもザリガニ釣りだけでは、完全にザリガニを駆除することは出来ませんので、みんなで池さらえをしました。
- 池さらえをして、見えるザリガニを全部捕まえても、石の間や粘土の中に潜って隠れていたザリガニが生き延び、春になると出てきました。
- 池さらえをしている間、ヤゴを別の水槽に移していたのですが、終わってから池に戻そうとすると死んでいたり、弱っていたりしていることが多く、ザリガニは減らないし、池さらえの時期と方法を、昨年初めて変えることにしました。
- 池さらえの時期は 12 月をやめて 6 月に、池は干さず、ヤゴはプールで保護するのを止めて、その日にうちに池に戻し、その日から約 1 ヶ月、ペットボトルもんどりで毎日残ったザリガニを採ってもらいました。おかげで、かなりのザリガニが居なくなっています。今年はどの程度までザリガニが減っているか、すごく楽しみです。夏に池さらえをするようになって、ザリガニがぐんと減りました。
- 貝塚高校の生徒も授業の一環で池の生きもの調べをしています。
- 授業開始後しばらくは、「気持ち悪い」などと言い、後ろで騒いだりしてあまり参加しませんが、決まって後半では、女の子も一緒になって池に入って楽しんでいます。
- バッタの原っぱでは、バッタ調べや鳴く虫の声を聞く会を開いています。バッタの原っぱと本当の里山とのバッタの種類の違いを比べたりします。
- 劇にして、トンボの池をつくるまでの様子をみんなに伝えました。



<運営する>

- 「水辺の楽校（がっこう）」は、以前は講師に来てもらっていましたが、今では「わくわくクラブ」で運営し、「ミニ水辺の楽校」と呼んでいます。

<提案する>

- 近木川河口で、「近木川汽水ワンド」を提案しました。現在では行政の事業になってしまったので、今は何も出来ていませんが…。

<まもる>

- 要家文化財の調査の折りに、自然遊学館が植物調査をし、その時、要家の庭が竹に覆われ、ひどい有様だったので、わくわくクラブから所有者に話して、庭の竹林伐採を行いました。
- おかげできれいになったのですが、あれから一度も訪問していないので、今はどうなっているかわかりません。「また行かんとかかんなあ」と思っているんですが…。

<交流>

- またトンボの池を作ったことから、各地のピオトープ作りのお手伝いや、経験談をお話しすることが多いです。
- 貝塚で全国トンボサミットを開催したことから、その後、全国トンボサミットに参加、大阪自然史フェスティバルにも出展しています。

<連携>

- 写真は堺市にある通所施設「わららか草部」での作業風景です。この施設の理事長さんから「施設に通う人がお風呂に入りながら、トンボが飛び交う様など見ることが出来たらうれしい」と頼まれ、トンボの池をつくりましたが水漏れしています。
- 貝塚の山手にある「農業庭園たわわ」の中の一つの池を、年に一度さらえています。池さらえをしていると、昔の樋が50年ぶりに泥の中から出てきました。その後も泥上げを続け、去年はついに樋が蘇り、樋を使って池の水を抜くことができました。
- 「ほの字の里」に協力していただいて、春の七草摘み行事をしています。摘んだ七草は参加者が持ち帰り、ほの字の里の食堂で七草粥をいただきます（有料）。

<援農>

- 自然遊学館わくわくクラブの仲間が、体調を崩されて入院されている間、ご自分の畑が荒れることを気に病んでおられたので、みんなで草刈に行きました。刈ってはいけないキュウリの蔓も刈ってしまったかもわかりませんが…（笑）。
- 仲間の果樹園のハッサク手入れ（剪定・摘果・収穫・選果）にも参加しています。この階段もみんなの手作りです。

<質疑応答&感想・意見>

Q：こういった仲間で活動しているんですか。

A：「自然遊学館わくわくクラブ」というものです。このクラブには 70 人前後が登録しています。中学生以上で構成されています。極小規模なので、封書電話での連絡は無理だから、メールアドレスを持っている人という条件をつけています。年間 100 円の会費で、毎月第 2 土曜日に自然生態園の維持管理に集まるのが基本です。家族で参加してくれる人が多いです。

Q：どうやって会員を増やしているんですか。

A：何かのイベントをやった時に、私が「この人ならいける!？」という感じの人に声をかけてお誘いします。人を捕まえるのが得意で好きなんです（笑）。



Q：近木川の汚れについて、原因は何でしょうか。

A：近木川流域に住む人口が増えたこと、その割りに下水道普及率が低いこともあります。川に物を捨てる習慣がありますが、川に捨てるものの質が変わってきています。お盆の供え物はまだいいとしても、農業関係のビニル系のものも目立ちます。

Q：最近、近木川の水量が少ない感じがするのですが、原因はあるのでしょうか。

A：水量が少ないことが、どこの川でも汚れの一因だと思っています。川の水量が減ったのは下水道が整備されて一気に海に流れ込むことにも要因があると思います。下水道が整備されると、その分川に流れる水が少なくなりますから。川に水を流すことも大事です。

砂利道は不便で、アスファルトは便利ですが、環境問題としては砂利道の方が雨水が浸透しますよね。でも今さら不便な生活には戻れないのが現状です。その辺は非常に難しい問題ですね。

Q：近木川にはホタルはいるのでしょうか。

A：近木川にも上流に行けばホタルはいます。大川や秣谷、蕎原あたりです。